〔注解〕

秋瑾詩詞全釈　（その一）

吉川榮一

Explanatory Notes on The Whole Poems of Qiu Jin <1>

Eiichi YOSHIKAWA

要旨

Qiu Jin（秋瑾）is well known as a prominent female revolutionist of modern China. She is also a femade poet representing the Qing（清）dynasty last stage. This paper is Chapter 1 of a series of trials which introduces all the poetry of Qiu Jin to the order which she created. I add notes and an interpretation to all the works of Qiu Jin. In this chapter, I am treating the poetry created around 1890 when she resided in Shaoxing（紹興）which is her hometown. Those days, she was still 15-18 years old. Therefore, it can be said that these poetry is the works created at her earliest time.

キーワード　秋瑾

前　言

秋瑾の詩文を集めたものとしては、一九〇七年に刊行された王芷馥編『秋瑾詩詞』以降、数種が世に出ているが、今日もっとも信頼に足るテクストとしては、それまでに出版された詩文集を基礎に遺漏を補い、一九六〇年にまず中

華書局上海編輯所から出版され、その後さらに修訂を経て一九九一年に上海古籍出版社から刊行された『秋瑾集』であろう。

近年になって、『秋瑾全集箋注』（郭長海・郭君兮輯注、吉林文史出版社、二〇〇三年）、『秋瑾選集』（郭延礼選注、人民文学出版社、二〇〇四年）と立て続けに、注解を付した詩文集が発行されるにいたった。両者とも拠り所としているのは、前述の『秋瑾詩詞』以来の数種の詩文集であるが、惜しむらくは、いずれの選集も完全な編年による編集ではない。

収録されている詩について見ると、近著二書のうち『秋瑾選集』は、「第一期　出国前」「第二期　留日時期」「第三期　帰国後直至就義」の三期に大きく分けられているものの、それぞれの時期のなかに入れられている詩は、必ずしも創作順ではなく、特に第一期はかなり入り乱れているように感じられる。一方の『秋瑾全集箋注』は、編年体ではなく分体による編集であり、秋瑾の好んだ詩体を窺うには便利であるが、秋瑾の詩作がどのように移り変わっていったのかを窺うことはできない。同書はそれぞれの詩について創作時期を推定しているものの、同書の推定創作時期は必ずしも『秋瑾選集』と一致していない。

拙稿は、上海古籍出版社版『秋瑾集』を基礎とし、近著二点を参照しながら、秋瑾の全詩作をできる限り創作された順に復元しつつ注釈を加えようとする試みである。生年さえ諸説かまびすしい秋瑾であるから、完璧に創作順に並べることなどもとより期しがたいが、せめて、少女時代、結婚前、結婚後、北京時代、日本留学時代など、節目節目ごとにまとまりを持ったものにできればと願っている。

第一章　少女時代（一）　浙江省紹興

父親の秋寿南（一八五〇～一九〇一）の任官地であった福建省で生まれた秋瑾は、一八八九年の末に原籍地の浙江省紹興に初めて戻り、この地で三年余りを過ごしたとされている。本章で扱うのは、彼女が湖南省長沙に移るまでの少女時代の詩である。一八七五年生誕説に従えば、秋瑾が十五歳から十八歳頃に当たる(注)。

水仙花

洛浦凌波女
臨風倦眼開
瓣疑呈玉盞
根是謫瑶臺
嫩白應欺雪
清香不讓梅
余生有花癖
對此日徘徊

洛浦（らくほ）　凌波（りょうは）の女（むすめ）
風に臨みて　倦眼開く

瓣は玉盞を呈するかと疑い
根は是れ瑶臺より謫されしか
嫩白は應に雪をも欺くべく
清香は梅に讓らず
余　生まれながらにして花癖有り
此に對して日び徘徊す

水仙の清らかな姿は、かの洛水の神宓妃が
風に向かって物憂げな眼を開いているかのよう。
その花弁は玉で作られた杯のように清らかで、
仙人の住むという瑶台から謫されてでも来たのかしら。
みずみずしい白い花弁は雪をも欺くほど白く、
すがすがしい香りは梅にもひけをとらない。
私は生まれつき花が大好き。
だから、毎日こうして水仙の花のまわりを歩いて眺めているの。

○洛浦　洛水のほとり。　○凌波女　洛神すなわち洛水に落ちて洛水の神となった、伏羲の娘・宓妃を指す。曹植「洛神賦」に、「凌波微歩、羅襪生塵」とある。　○玉盞　玉でできた杯。水仙の花を杯に例えて言う。　○瑶臺　仙人の住む高殿。　○嫩白　みずみずしい白さ。　○花癖　花を愛でる性癖。

紅蓮

洛妃乗醉下瑶臺
手把紅衣次第裁
應是絳雲天上幻
莫疑玫瑰水中開
仙人遊戯曾栽火
處士豪情欲憶梅
奪得胭脂山一座
江南兒女棹歌來

洛妃　醉ひに乗じて瑶臺を下り
手に紅衣を把りて次第に裁つ
應に是れ　絳雲　天上の幻なるべし
疑ふなかれ　玫瑰の水中に開くを
仙人　遊戯して　曾て火を栽う
處士の豪情　梅を憶はんと欲す
胭脂山一座を奪ひ得て
江南の兒女　棹歌して來たる

水面(みなも)に広がる美しい紅(くれない)の蓮の花は、洛水の女神洛妃が酔いにまかせて仙界から下り、
手に取った紅の衣を次から次へと切り取っては水に浮かべたものなのかしら。
赤い雲がまるで天界の幻のように水に浮かび、
赤い玫瑰(はまなす)の花が水中で開いていると云ってもおかしくないわ。
それとも、仙人が戯れに水中に火を植えたのかしら。
気高い気性で知られる孤山の処士林和靖なら、きっと紅梅の花を思い浮かべることでしょう。
臙脂山(えんじざん)の赤い臙脂をすっかり奪い取ったような紅の蓮の間を、
江南の若い娘たちが舟歌を歌いながらやってくるわ。

○洛妃　前出の宓妃。　○次第　次々に。　○絳雲　赤い雲。　○處士　孤山処士林逋（和靖、九六七～一〇二八）を指す。梅と鶴をこよなく愛したことで知られる。　○豪情　気高い気性。　○胭脂山　臙脂山。燕支山をさし、臙脂（燕支）草を産することから名付けられたという。匈奴の領内にあったが、のちに匈奴はこの山を失い、「失我燕支山、使我婦女無顔色」と歌ったという。　○棹歌　舟を操りながら歌う歌。舟歌。

白蓮

莫是仙娥墜玉瑞
宵來幻出水雲鄉
朦朧池畔訝堆雪

淡泊風前有異香
國色由來誇素面
佳人原不藉濃粧
東皇爲恐紅塵涴
親賜寒簧明月裳

是れ仙娥の玉璫を墜とせるにあらずや
宵來たりて幻出す　水雲鄉
朦朧たる池畔　堆む雪かと訝しみ
淡泊たる風前　異香有り
國色　由來　素面に誇るも
佳人　原より濃粧に藉りず
東皇　紅塵の涴れを恐るるがため
親ら寒簧に明月の裳を賜ふ

水面に浮かぶ純白の蓮の花は、仙女が落とした白玉の耳飾りかしら。
宵闇迫る蓮池は、まるで仙境があらわれいでたかのよう。
夕もや浮かぶ池の畔は白く輝き、雪が積もっているのかと見まごうほど。
そそ吹く風にのってかすかに良い香りが漂ってくる。
牡丹の花のような美人は元来化粧気のない女性を前に鼻高々だけれど、

ほんとうにきれいな人は、もともと濃いお化粧に頼ったりしないわ。
ほら、春の神さまは蓮の花が俗塵で汚されないように、
地上に降りた仙女のような蓮の花に、月のように輝く白い裳をみずから下さっているわ

○仙娥　天上の仙女。　○玉璫　玉で作った耳飾り。　○水雲鄉　水上に雲のたなびく仙境。蘇軾「和章七出守湖州記」に「方丈仙人出渺茫、高情猶愛水雲鄉」とある。　○國色　國色は、「國色天香」すなわち牡丹を指すが、転じて国いちばんの美女をも意味する。ここでは、その両者を兼ねて用いている。　○由來　もともと。元来。　○素面　化粧をしていない顔。素顔。　○東皇　春を司る神。青帝とも云う。　○紅塵涴　俗塵に汚されること。　○寒簧　神話中の仙女。西王母の散花女史であったが、のちに月宮の侍書となり、嫦娥に紫雲の歌と霓裳の曲の舞を学んだとされる。『紅楼夢』第七十八回中の「芙蓉女兒誄」に「弄玉吹笙、寒簧擊歌」の語が見える。
○明月裳　明るい月のように白く輝く裳。裳とは長いスカート状の衣服。

分韻賦　柳

獨向東風舞楚腰
爲誰顰恨爲誰嬌
灞陵橋畔銷魂處
臨水傍堤萬萬條

独り東風に向かひ　楚腰舞ふ
誰が爲にか顰恨し　誰が爲にか嬌す

灞陵橋畔　銷魂の處
臨水の傍堤　萬萬の條

ひとり春風にしなやかに揺れる柳の枝よ、
誰を思って顔をしかめて悲しみ、誰を思ってあでやかに舞うのか。
覇橋のほとりは悲しみの地。
水辺の堤では、数え切れない柳の枝が切なげに揺れている。

この詩を含む分韻賦八首は、秋瑾の兄嫁である張淳芝（一八六九～一九五五）の描いた絵に合わせて詠んだ「蘭花」にはじまる一種の組詩である。秋瑾の兄・秋誉章（一八七三～一九〇九）が張淳芝と結婚したのは一八九一（光緒十七）年であり、一八七五年出生説に従えば、秋瑾の満十六歳頃の作と考えられる。なお、これが一八九一年前後の作であることについては、「分韻賦　蘭花」で改めて触れる。

○楚腰　女性のほっそりした腰。ここでは風にそよぐ柳の枝を指す。　○顰恨　恨めしげに顔をしかめる。　○灞陵橋　灞陵＝覇陵は、今の陝西省西安市の東にあり、漢の文帝の陵がある。ここで言う灞陵橋は、覇橋のことであり、漢人はこの橋まで旅立つ人を送り、柳の枝を折ってはなむけとした。　○銷魂　魂が消え入らんばかりの哀愁の極み。惜別の地・覇橋の別名を銷魂橋とも呼ぶ。

分韻賦　梅

開遍江南品最高
數枝庾嶺占花朝
清香猶有名人賞
不與夭桃一例嬌

開くこと遍し　江南　品（ひん）　最も高し
數枝の庾嶺（ゆれい）、花朝を占む
清香　猶ほ名人の賞（め）でる有り
夭桃（ようたう）と一例の嬌にあらず

江南の到るところに花開く梅こそ品格第一。
庾嶺に咲く梅は、春のどの花々にもまさる。
すがすがしいその香りは、やはり誉れ高き人々の愛（め）でるところであり、
桃の花の艶やかさとは別のおもむきがあることだ。

○庾嶺　五岳の一つ大庾嶺を指す。江西省と広東省の境にあり、梅の名所として知られ、梅嶺の名もある。　○花朝　様々な花が咲き誇る春の朝。　○清香　梅の花のすがすがしい香り。　○夭桃　みずみずしい桃。『詩経』「周南・桃夭」に「桃之夭夭」とある。　○一例　同様。同じ。

分韻賦　玫瑰

聞道江南種玉堂
折來和露鬬新妝
却疑桃李誇三色
得占春光第一香

聞くならく　江南　玉堂に種ゑ
折り來たれば　露に和して新妝を鬬ふ
却って疑ふ　桃李の三色を誇るを
春光第一香を占め得たり

聞くところでは、江南の立派なお屋敷では玫瑰を植え、
折り取ってきたばかりのその花は、朝露を帯び、美しい女性のよう。
桃や李は、玫瑰とならんで赤・桃・白の三様の美しさを誇ると言うけれど、
やはり春の景色に一番映えるのは、玫瑰の花。

○玫瑰　赤い花をつけるはまなし。　○玉堂　美しい御殿。玫瑰は赤い宝玉の名でもある。　○新妝　化粧したての美しい姿。　○春

光　春の美しい景色。

分韻賦　秋海棠

栽植恩深雨露同
一叢淺淡一叢濃
平生不藉春光力
幾度開來鬬晩風

栽植の恩深きこと　雨露に同じ
一叢は淺淡にして　一叢は濃し
平生　春光の力を藉(か)りず
幾度(いくたび)開き來たりて　晩風と鬬(たたか)ふ

人の手によって植え育まれた恩の深さは、雨露の恵みにも等しい。
眺めやると、薄桃色の花の株もあれば、深紅の花を咲かせている株もある。
秋に咲く秋海棠は、うららかな春の光の力に頼ることなく生長し、
毎年毎年、秋の夕暮れの風の中で美しい花を咲かせている。

○栽植　栽培する。　○淺淡　色が濃くないこと。なお、『紅楼夢』第三十八回中の史湘雲「對菊」詩中に「一叢淺淡一叢深」とあり、秋瑾のこの句はこれを踏まえたものと考えられる。　○幾度　秋海棠は多年草であり、冬になると地上部は枯れ、翌年また生長して秋に花を咲かせることによる。　○晩風　夕暮れどきに吹く風。

分韻賦　杜鵑花

杜鵑花發杜鵑啼
似血如硃一抹齊
應是留春留不住
夜深風露也含淒

杜鵑花發き杜鵑啼く
血の似く硃の如く　一抹齊し
應に是れ　春を留めんとして留めて住まざるべし
夜深まれば　風露もまた淒を含む

つつじが花開き、時を同じくしてほととぎすが鳴く。
つつじの花は血のように赤く、ほととぎすは硃のような赤い血を吐きながら啼いて空を過ぎり、花のあたりは一面ひとしく朱に染まっている。

つつじもほととぎすも何とかして春の逝くのを押しとどめんとしているかのようだ。
夜も更けてくると、心なしか夜風と夜露の冷たさがひしひしと身に迫ってくる。

○杜鵑花　つつじ・さつきの類。杜鵑が鳴く頃咲くことにより、杜鵑花の名がある。また、杜鵑が鳴くおり嘴から流した血によって花が赤く染められたとの伝説がある。　○硃　辰砂・丹砂の類。赤色の顔料。　○一抹　一様に。　○風露　風と露。蘇軾「自興国往筠」に「夜深風露満中庭」とあるのを踏まえたものか。　○淒　寒さがひしひしと身に迫るさま。

分韻賦　芍薬

開遍嫣紅白雪枝
銷魂底事喚將離
年來景色渾消瘦
減却腰間金帶圍

開くこと遍し　嫣紅白雪の枝
銷魂　底事ぞ　將離と喚ぶ
年來の景色　渾て消瘦
減却す　腰間の金帶圍

あでやかな紅や雪のように白い芍薬の花が一面に咲き誇っている。
將離と喚ばれるのは、いったいどのような悲しみを秘めてのことなのだろう。
悲嘆のあまり、このところすっかり痩せ細ってしまい、
かつては二巻きしていた腰の金の帯は、三重に巻いてもまだ余るほど……

○嫣紅　あでやかな濃い紅色。　○銷魂　魂が消え入らんばかりの哀愁の極み。　○底　なんぞ、なに。底事は、なにごと。　○將離　芍薬の別名。『韓詩外傳』では芍薬を「離草」とし、崔豹『古今注』には「芍薬一名可離、將別、故贈之」とある。賈祖璋『花与文学』（上海古籍出版社、二〇〇一年）参照。　○渾　すべて、まったく。　○消瘦　やせ衰える。　○減却　すり減らす。ここでは痩せ細る意。　○金帶圍　芍薬の珍品の名。金腰帯とも云う。
○この詩は、植物としての芍薬を離れ、そこから触発された想像上の意境を詠んだもののようである。

分韻賦　桃花

豔色穠芳夾岸栽
芧蘿溪下水潾洄
料因王母瑶池謫
獨向深閨仕女開

豔色穠芳　岸を夾みて栽う
芧蘿溪下　水潾洄す

因るところを料れば　王母に瑶池より謫せられしか
獨り深閨の仕女に向かひて開く

艶やかな紅の桃の花が両岸から芳香を放ち、
苧蘿山中の渓谷では、水が渦を巻いて流れている。
これらの美しい桃は、西王母のとがめを受けて仙界から流されてきたものなのだろうか。
ただ深窓の麗人にだけ、その美しい姿を見せている。

○艶色　つややかで美しい色。　○穠芳　濃厚な芳しい香り。　○苧蘿　浙江省諸暨県の南にある山の名。西施はこの山の薪売りの娘と伝えられている。　○滎洄　水がめぐり流れる。　○料　推し量る。　○王母　西王母。西方の崑崙山に住んでいたという伝説上の仙女。西王母の庭には、三千年に一度実のなる桃があり、その桃を食べると永遠に年をとらないといわれる。　○瑶池　天上の仙人の住む所。　○深閨　家の奥深くにある婦人の部屋。　○仕女　上流階級の女性。

分韻賦　蘭花

九畹齊栽品獨優
最宜簪助美人頭
一從夫子臨軒顧
羞伍凡葩鬬豔儔

九畹齊しく栽う　品　獨り優たり
美人の頭に簪助するに最も宜しかるべし
一に夫子に從ひ　軒に臨みて顧み
凡葩に伍して豔を鬬ふの儔たるを羞ず

一面に植えられている蘭の花は、気品がひときわ優れ、
まさに美しい女性の髪を飾るにふさわしい。
一途にりっぱな男子に付き従い、お屋敷の方に向かって花開かせ、
ありふれた花々と一緒になって美しさを競うようなことは決してしない。

○秋社が一九一三年に発行した『秋女侠詩文稿彙編』では、「爲嫂氏畫吾郷九節口占」と題して収録されており、前述の通り秋瑾の兄・秋誉章（一八七三～一九〇九）が張淳芝と結婚したのは一八九一（光緒十七）年である。なお、「九節」とは、俗に九節蘭と称せられる蕙蘭のことである。　○九畹　畹は面積の単位。一畹は、三十畝または十二畝という。その広さは時代により異なる。『楚辞・離騒』に「余既滋蘭之九畹兮」とあり、以来、九畹は蘭を意味する典実となっている。　○簪助　簪のように挿す。簪は、かざす、髪の中に挿しこむの意。助は、加えるの意。　○夫子　男子の美称であるが、大夫の位にある者への敬称としても用いられ、ここでは楚の三閭大夫であった屈原を念頭に置いている。　○軒　軒堂。りっぱな屋敷。　○凡葩　葩は花。凡葩は平凡な花、普通の花。　○鬬豔　美しさを競う。　○儔　同類。なかま。

○蘭の花に仮託して、若き秋瑾自らの願いと矜持を詠んだものと考えられるが、『秋女侠詩文稿彙編』の「爲嫂氏畫吾郷九節口占」という詞書きに即して解釈すれば、三四句は次のように読み解くことができよう。

お姉さま（張淳芝）は、ひとえに夫であるお兄さま（秋誉章）にお仕えし、いつもお兄さまのいらっしゃる高堂に気を配っておいでです。お姉さまは、ご自身がお描きになった蘭の花と同じように、その辺のありふれた女性と妍を

競うことを潔しとしないほどお美しいことです。

注

拙稿では、秋瑾の伝記的事実については、陸象恭編著『秋瑾年譜及伝記資料』（中華書局、一九八三年）、郭延礼『秋瑾年譜』（斉魯書社、一九八三年）をも参照したが、基本的には、王去病・陳徳和主編『秋瑾研究叢書第二輯　秋瑾年表（細編）』（華文出版社、一九九〇年）に依拠した（以下、『秋瑾年表』と略称。）。跋文に記すところによれば、同書は、上述の二つの年譜をはじめ一九八九年までに刊行された秋瑾の評伝や年譜の遺漏を補い錯誤を正して編定作業を行っており、現時点では最も信頼に足るものと認められるからである。

なお、『秋瑾年表』が、この時期の作としているもののうち、「読書口号」「題芝龕記　八章」「白梅」「詠白梅」「雑興　二首」については、本章に続く時期のものと考える。次章以降で取り扱いたい。